

あしがきの「あしがき」

拙著『公共事業と財政』の刊行から4ヶ月が経つ。売れ行きが気になるところだが、こうした専門書はなかなか思うようには売れない。じっくり待つほかないようだ。

ところで拙著のあしがきにも書いたが、私が公共事業に関心をもつようになったのは、宮本憲一『社会資本論』との出会いからである。信州・松本の地で大学生活をおくっていた頃、松本城の近くの古本屋でふと手にしたのが『社会資本論』であった。正直なところ、『資本論』の前に「社会」という言葉がつくタイトルに引かれて本を手にした。大袈裟なようだが、それが私の「人生」を決めたといえる。こうした大学時代の思い出を昨夏に松本で語る機会があった。



「ヒマラヤ杉の会」という信州大学の卒業生の集いがあり、昨年始めて参加して、研究のあゆみと公共事業について語った。会場は「あがたの森」の講堂である。ここは私が通った人文学部のキャンパスがあった所で、その昔は旧制・松本高校や北杜夫の作品で有名な思誠寮があったところでもある。この講堂には2つの思い出がある。一つは、ここで友人と二人で「松川事件」の映画上映会をやったことである。どれだけ集まるか不安であったが、会場一杯に人が集まり、興奮したことを今もはっきり覚えている。もう一つは、大学「紛争」の際に団体交渉をしたことなどだ。

今の学生たちには理解されにくいだが、私の大学時代は「紛争」にあけくれていた。とくに2年から3年にかけて、とりわけ人文学部で「紛争」がつづき、勉強どころでなかった。こんな時に『社会資本論』と出会ったのである。『社会資本論』の初版は1967年に出版されたので、2~3年後に手にしたことになる。この本を最初に読んだ時は、とくに理論部分はほとんど理解できなかった。それでも何回か読むにつれて少しずつ理解できるようになり、社会資本についての興味もわいてきた。

『社会資本論』にめぐり合えたのは偶然ばかりではない。今は亡き渡辺義晴先生による「資本論をドイツ語で読む会」に参加したことである。とにかく渡辺先生の話が面白く、いつの間にか『資本論』への興味が高まっていった。その『資本論』の前に「社会」がつくタイトルの本、『社会資本論』がふと目にとまったのである。

(6月18日記)